

泉大津市長の南出賢一です。

3月から、5歳11歳の小児へのワクチン接種が始まりました。

これについて、相当悩まれてる保護者の皆さんも多いと思いますし、問い合わせも非常に増えています。

で、泉大津におきましても、希望される方に対しては接種ができるように、ひとまずワンクッションおくために、対象者がおられる世帯に案内のハガキを、もうすでに通知をさせていただいております。

そこでいったん立ち止まって、冷静に考えて、接種を希望されるご家庭は、申請をオンラインでも電話でも、やっていただけたら、接種券をお送りすると、そういう流れを作っております。

で、接種の判断についてですけれども、「接種を希望する」、「接種を希望しない」、「様子を見る」、この3つがあります。

で、常々この情報提供は、やっぱり2023年5月までは、いわゆる第4相臨床試験中ということで、いいことも悪いことも、その時々でわかってくることが多いものですから、副反応の報告の状況とかも、都度情報発信させていただいております。

ただ、今回情報発信しながらですね、じゃあ、どう判断したらいいかということ迷われる方もいると思うので、私なりの考え方をお伝えさせていただきます。その上で皆さん自身も、しっかりと考えて判断をやっていただけたらいいなというふうに思っています。

では画面の共有をさせていただきます。

結論から、私がもう、調べに調べて、ずっと継続しながら情報収集やる中で、まずあの、結論、健康なこどもへの接種に合理性を見出せない3つの理由ということで、お話をさせていただきます。

まず1つ目、エビデンスがない、ということです。

2月9日衆議院予算委員会におきまして、後藤厚生労働大臣の答弁で、オミクロン株については5歳から11歳の直接のデータは現時点で存在していない。

さらに薬事衛生食品審議会においても、5歳から11歳に対しても、成人と同様の効果があると推測されているのが科学的な正確な言葉、というふうな答弁がありました。

厚生科学審議会・ワクチン分科会で、この特例承認がなされる分科会の中でも、例えばですけども、委員の先生の鈴木先生が、例えばですが、二次感染予防効果はほとんど期待ができない。

さらに発症予防、重症化予防についてもエビデンスが十分ではないと話されたり、森内先生については、感染予防効果、これ、期待できるものではなくて、そこをやっぱり過度に期待してしまうと、同調圧力が生じたりしかねないという懸念のような発言もありました。

さらに、これあの、先日3月1日朝日新聞の夕刊の記事にこういった記事がありました。

ニューヨークの保健当局の研究者が研究やったこれ査読前の論文なんですけれども、アメリカで5歳11歳接種をした36万5,000人を対象に追跡調査をしたところ、大体1ヶ月ぐらい経った時には、当初は、だいたいVEっていうこの感染予防の効果が68%、これが1ヶ月ちょっと経った時には、12%に低下をしたという研究内容でありました。

これはですね、実は元の、出典元を、これ紐解いていきますと、まだその先にいろいろ書いてて、1ヶ月からさらにもう少し6週目ぐらいに入った時から急激にこの効果が低減をして、逆に接種をした方のほうが感染しやすくなるっていうデータが出ておりました。

あくまでも査読前の論文ではありますけども、実はこのニュースが出てから、国会でも少しずつ取り上げられそうな気配が出てきたり、さらには、市民の皆さん、また、いろんなところから、これどうなんですか、という事の間い合わせが増えています。

なので、これについては、ちょっとこのあとの情報も注視をしたほうがいいと、これ無視するわけにはいかないと、いうことであえて取り上げさせていただいております。なので、わからないことがまだまだあるというふうに考えています。

2つ目の理由が、健康なこどもの重症化は極めて稀であるということです。

これは厚生科学審議会・ワクチン分科会の中の資料ですけども、左側がデルタ株の時、右側がオミクロンの時の肺炎以上の割合が年代別で記されています。

やはりデルタの時よりも、オミクロンになってから、発生の頻度というものは下がってるかなというふうに見てとれますが、大体0.08%、5歳から11歳に関しては0.08%、1万人に8人ぐらいの方が、まあ肺炎以上で報告されてるという内容です。

そして、大阪府の、これデータを見てみますと、第1波から第6波、上が重症化率、下が死亡率の変遷になります。

こうやって見ていきますと、19歳以下で、第6波、いわゆるオミクロン株が流行やっってる時期は、大体10万512人に5人の、19歳以下重症者、0.00% というふうに出ています。

20代～30代は11万3,650人の中で6人が重症として報告されているというふうになっております。そして下、死亡に関しては19歳以下、20代30代は死亡報告はありません。

さらに、これ非常に大事だなと思ったんですけども、2月16日の大阪府新型コロナウイルス対策本部会議で、朝野座長が以下のように発言をされています。

オミクロン株は若年層にとっては、軽症で推移する季節性インフルエンザ並み、高齢者にとっては、インフルエンザよりも重症化しやすい、そしてその下、小児にとっては、インフルエンザ脳症の発症がないため、インフルエンザの方が重症化率が高いと言える、という発言をされています。

3つ目の理由が、副反応リスクが高いということです。

最新の、この副反応の情報は、2月18日の厚生科学審議会の中で、資料も公開されています。資料の中身を集計しますと、今、累計接種回数が約2億回、で、これまで副反応疑い報告で死亡報告が1474名、重篤な副反応が6454名、これを年代別に分けると、この資料の通りになります。

これだけではなかなかかわからないと思いますので、2年間のコロナの累積死者数とワクチン接種後の副反応疑いで報告されてる重篤な副反応、死亡の報告について年代別で表をまとめました。

例えばですけども、10代見ますと、コロナで亡くなった方が4名、ワクチン接種後に亡くなった方が5名、そして、重篤な副反応が398名と報告されています。

この398名の中で、まだ日常生活に支障をきたしてる方が、たくさんいるというふうに、推測ではなくて、いろいろと報告はあがっていると思います。すべてが追跡できているのはわかりませんが、これだけの数があがっています。

コロナで亡くなった方は4名となっておりますが、現在おそらく5名だと思えます、10代は。この4名のうち3名は、基礎疾患がある方でした。1名は交通事故で亡くなられて、あとからPCR検査をやったら陽性だったので、こちらにカウントされています。

もう1名の方は、先般、埼玉県の学生さんが亡くなられた事例だと思えます。ワクチンを2回接種をやっていた健康な方でしたけども、罹患をしてから亡くなった、というニュースでありました。

こうやって見ていきますと、年代ごとに、リスクとメリットのところもひとつ比較ができるのではないかと思いますし、おそらくこの10代20代見ても、これまでのコロナで累積で重症者、ここまで数字は出ていません。

そして、こちらは心筋炎・心膜炎の内容になります。これはファイザーの心筋炎疑い、ファイザーの心膜炎疑い、モデルナの心筋炎、モデルナの心膜炎疑い、になります。

これ、12月24日、昨年12月24日の厚生科学審議会の資料の取りまとめた数字であります。やはり若い男性に発生の頻度が多くなっているのではないかなというふうに見えます。

19歳以下で175名の方が心筋炎・心膜炎疑いで報告されています。

昨年の12月の3日に、厚生労働省から、若い男性に心筋炎・心膜炎疑い多いということで、これらを重大な副反応として、医療機関は積極的に報告をすること、また、自治体に関しては、接種対象者、若い男性で心筋炎・心膜炎が多いということで、しっかりとこの事実を周知するようにという通達がございます。

しかし、1月、2月に開催された心筋炎・心膜炎疑い報告では、これら年代別、男女別の詳細な資料は削除されているのか、見当たりません。なので、我々としたら、しっかりとこういったわかってきた事実は伝えたいのですが、12月24日のままで、こちらについては止まっております。

さらに5歳～11歳の、このワクチン小児への接種を薬事承認する前の、この分科会の中で、アメリカにおける5歳～11歳と12歳～15歳の接種をやったあとの1週間の追跡調査、副反応について、資料がありました。

オレンジ色が12歳15歳、青色が5歳11歳になります。このD1、D2というのが1回接種、2回接種です。で、見ていくとですね、気になったのがありました。

これなにかというと、2回接種やったあと5歳～11歳で7.4%の方が日常生活に支障をきたしている。そして、2回接種やったあと10.9%の方が登校できないというふうな報告があがっています。こののち、どうなったのかはわかりませんが、このあたりの出てきてることについても、非常に気になる所です。

これらを取りまとめてYahoo!の特設サイトにも、先ほどの表を日本語版に直したものが出ています。やはりこういったことが報告されているという事実については、知っていただきたいなというふうに思います。

色々とお話をさせていただいたんですけども、接種主体者として希望される方には、当然スムーズに接種を準備をするというわけですけれども、やはりその、必要性、この健康な小児へのワクチン接種の必要性と合理性についてですね、お医者さんとか国の政治家とかもいろんな方に、合理性必要性について教えてほしいということも、度々いろんな所で言うんですけども、やはりそこについて説明をやって下さる方が一人もいません。

で、やはりあの、いろんな情報をとって行く中で、そこがやっぱり見いだせないというところに、非常に、あの、不安を感じております。

保護者の皆さんももっと多分不安を持たれていると思うんですが、これらの理由からですね、健康な方には、今の現段階では、この接種の必要性、合理性は見出すことはできないというのが、今の私のこれは見解であります。

皆さんはどう思われるでしょうか。情報は、ほんとに、あの、しっかりといろんな角度からたくさんとって、総合的に判断することが求められると思います。

じゃあ健康なこども以外の、例えば基礎疾患を持っている方についての接種についてですけども、泉大津も優先的に基礎疾患のある方から、小児については接種を進めるんですけども、逆にその基礎疾患の内容によっては、得られるメリットもあるかもしれないけれども、逆に基礎疾患の内容によってはリスクにもなってしまう、ということも言われてるお医者さんもたくさんいます。

なので、接種に際しては、いろんな情報を取りながら、お医者さんにも慎重に相談をしながら、接種の判断をやっていただきたいというふうに思っております。

縷々色々とお話をさせていただきましたけれども、やはり接種を判断するにあたっては3つです。「接種を希望する」「接種を希望しない」「様子を見てから決める」ということも大事になってこようかと思えます。

このあたり、冷静に判断をやっていただいて、そしてそれぞれが、判断やったことについては、皆でしっかりと尊重するということが大事にしたいなと思えますし、万が一、その副反応が出た場合、それが長引いている場合、泉大津市におきましては、この高齢者接種が始まった段階から、市の健康づくり課で、独自のこの相談窓口、ワクチン接種後の副反応とか、長期にかかってやっぱり調子が悪いとか、そういったことに対して、副反応の相談窓口はもう当初からつくっておりますので、また何かあれば、医療機関に相談するもよしですし、是非とも泉大津市の、このワクチン接種後の副反応ないし、この後遺症に対しても、相談窓口に問い合わせただければありがたいなと思っております。

こういった情報が一人でも多くの方にちゃんと届いて、自分の頭で判断をやっていただけるように、見ていただいた方については、これ泉大津市民に限らず、どうか、お友達とかお知り合いの方に知らせてあげて、みんなでやっぱり、よりよい方向が何かということを考えていく、それがすごく私は大事だと思っております。

はい、以上で今回私からのメッセージとさせていただきます。ご清聴いただきましてありがとうございました。